北海道公立大学法人
札幌医科大学
Sapporo Medical University

札幌医科大学学術機関リポジトリ ikor
SAPPORO MEDICAL UNIVERSITY INFORMATION AND KNOWLEDGE REPOSITORY

Title	急性期看護実習における集中治療室見学実習の看護学生の学び ： 教育目標分類学による学習成果の評価（第 1 報）
Author(s)	大塚, 知子; 牧野, 夏子; 城丸, 瑞恵; 仲田, みぎわ; 澄川, 真珠子
Citation	札幌保健科学雑誌,第 6 号: 35-41
Issue Date	2017 年
DOI	10.15114/sjhs.6.35
Doc URL	http://ir.cc.sapmed.ac.jp/dspace/handle/123456789/6988
Type	Technical Report
Additional Information	
File Information	n2186621X635.pdf

・コンテンツの著作権は、執筆者、出版社等が有します。
・利用については、著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲内で行ってください。
・著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲を越える利用を行う場合には、著作権者の許諾を得てください。

札幌保健科学雑誌　第６号　35－41（2017）

研究報告

急性期看護実習における集中治療室見学実習の看護学生の学び
―教育目標分類学による学習成果の評価（第１報）

大塚知子、牧野夏子、城丸瑞恵、仲田みぎわ、澄川真珠子

札幌医科大学保健医療学部看護学科

本研究の目的は、急性期看護実習におけるICU見学実習を通して振り返った実習レポートから、教育目標分類学による学習成果の評価の視点で学生の学びを明らかにすることである。対象はＡ大学看護学生のうちICU見学実習を行い同意の得られた学生の実習レポート21部である。実習レポートに記載された学びを認知領域、精神運動領域、情意領域に分類し、質的帰納的に分析を行った。認知領域からは、①医療者間の連携、②看護師に必要な能力・役割、③患者・家族への看護援助、④倫理的問題に関する4つの理解が、情意領域からは、①患者・家族の特徴、②看護師の在り方、③病棟環境などの7つの気づきが学びとして抽出された。精神運動領域からは学びは抽出されなかった。ICU見学実習は、どの学生にも急性期看護におけるICU看護の特徴・意義に関する学びが認められた。

キーワード：急性期看護実習、集中治療室見学実習、学習内容、看護学生、教育目標分類学

Nursing Students' Learning from Study Visits to ICU as Part of Practical Training for Acute Phase Nursing: Evaluation of Learning Performance Based on the Taxonomy of Educational Objectives (Part 1)

Tomoko OTSUKA, Natsuko MAKINO, Mizue SHIROMARU, Migiwa NAKADA, Masuko SUMIKAWA

Department of Nursing, School of Health Sciences, Sapporo Medical University

This study aims to clarify the learned content of nursing students from the viewpoint of assessed results of learning content based on taxonomy of educational objectives, and using a practical training report in which the nursing students reflected on ICU visits during acute care nursing practice. The subjects were assessed using 21 practical training reports obtained from the nursing students at University A, who visited the ICU as a part of practical training; all participants provided consent to participate in this study. The content of the practical training reports was classified as belonging to the cognitive, psychomotor, or affective domains. These data were analyzed qualitatively and inductively. From the cognitive domain, four comprehension items regarding the following were extracted: (1) cooperation among medical service providers, (2) abilities and roles necessary for nurses, (3) nursing support to patients and their family, and (4) ethical problems. From the affective domain, seven items to be aware of regarding the following were extracted: (1) characteristics of patients and their family, (2) the ideal attitude of nurses, (3) departmental environment, etc. From the psychomotor domain, no learned content was extracted. Following the completion of practical training through ICU visits, learned content regarding the characteristics and significance of acute care nursing at ICU was found in all the students.

Keywords：Acute nursing practice, ICU observation training, Learning content, Nursing students, Taxonomy of educational objectives

Sapporo J. Health Sci. 6：35-41(2017)
DOI：10. 15114/sjhs. 6. 35

受付日：2016年11月４日　　受理日：2017年２月２日

＜連絡先＞　大塚知子：〒060-8556　札幌市中央区南1条西17丁目　札幌医科大学保健医療学部看護学科

Ⅰ．はじめに

近年、医療の高度化、入院患者の高齢化、在院日数の短縮等に伴い、保健、医療、福祉のあらゆる場面において看護師の役割は拡大し、高度な能力が求められ、看護系大学には質の高い看護師等を輩出することが期待されている。このような社会的ニーズから「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会の最終報告」[1]の中でも学士課程における看護実践能力の向上について報告されている。これらの看護実践能力は基礎科目、専門基礎科目、専門科目での講義や演習による学習の成果を踏まえて、臨地実習の中で統合し培われていく。

成人看護実習は、健康障害を持つ成人期の対象を受け持ち、健康レベルに応じた潜在的・顕在的な問題を解決するために看護過程の展開を行い、看護実践を通して看護の機能、役割を学ぶことが目的であり、幅広い知識や看護実践を学ぶ機会となる。成人看護実習は慢性期と急性期の臨地実習に大別され、急性期看護を学ぶ際には、周手術期の対象を受け持ち、健康レベルに応じた看護過程の展開と看護実践を通して学習する設定が典型的である。また、医療の高度化に伴い、高次医療における急性期看護を学ぶ機会として、集中治療室（以下、Intensive Care Unit；ICU）や高度救命救急センターの見学実習を導入している看護系教育機関が増えている。

このような背景もあり、本学における急性期看護実習は、周手術期看護実習だけでなく、集中治療看護や救急看護を学ぶ目的で、ICUや高度救命救急センターでの見学実習を導入している。しかし、ICUや高度救命救急センターなどの高次医療の場は、様々な医療機器が設置され医療が優位となる環境であることから、学生にとっては看護の独自性を気づくことに困難を抱く可能性が高い[2]。そのため、看護実践能力の向上を目指した高次医療を学ぶ機会としてICUや高度救命救急センター見学実習を設定する上では、学生のレディネスに応じた実習目的や目標の設定が必要不可欠となる。学習の目的・評価を設定する上では、教育目標分類学の活用が有効である[3]。教育目標分類学は、教育において達成されるべき目標の全体を認知領域、精神運動領域、情意領域の3つに分け、学生が質の高いケアを提供することを学ぶ方法を形成する学習活動に枠組みを提供する[4]。先行研究では、ICUや高度救命救急センターの各実習における学生の学びの報告[5][6]はあるが、教育目標分類学による学習成果を評価した報告はない。

そこで、本研究では、看護実践能力向上を目指した急性期看護実習におけるICUや高度救命救急センター見学実習の在り方を検討する第一歩として、教育目標分類学による学習成果の評価の視点で認知領域、精神運動領域、情意領域の3領域のICU見学実習での学生の学びを明らかにする。

Ⅱ．研究目的

ICU見学実習を通して振り返った学生のレポートから、教育目標分類学による学習成果の評価の視点で認知領域、精神運動領域、情意領域の学びを明らかにする。

Ⅲ．用語の定義

認知領域の学び：知的活動に関わる領域であり、レポートの中で「～と理解した」と同等に表現されているものとする。理解とは、実習において得られた知識の意味を解釈し、既知との関連や現象との関連性を説明していることとする。

精神運動領域の学び：技術を展開するときに必要な能力や技能とし、レポートの中で「～を実施した」と同等に表現されているものとする。なお、実施とは、観察や知識を想起しながら、臨床指導者等の見守りのもと一人で看護行為を行うこととする。

情意領域の学び：実習場面において看護に関する様々な価値、態度、信念に対して感じとることや問題に対する反応とし、レポートの中で「～に気づいた」と同等に表現されているものとする。なお、状況に対する気づきの内容を反映した援助の必要性を表現しているものも含む。

Ⅳ．研究方法

1．研究デザイン

質的記述的研究デザイン

2．データ収集期間

平成28年6月～7月

3．研究対象

Ａ大学で平成27年度に急性期看護実習を終えた看護学科3年生のうちICU見学実習を行い同意が得られた学生のICU見学実習のレポート（以下、見学実習レポート）とした。この見学実習レポートは、見学実習における自己の学びや課題を振り返る記録であり、字数制限はなくA4版1枚程度で記載すること、実習評価の参考にしていることを実習オリエンテーションで学生に説明している。

4．実習の概要

Ａ大学では3年次後期に急性期看護実習として、外科系病棟において3週間の実習を実施する。外科的療法を受ける患者1名を受け持ち、臨床指導者の指導のもと、周手術期における看護を実践する。50名の学生のうち毎年15名程度の学生が、受け持ち患者のICU入室に伴いICUで看護実践を行っている。受け持ち患者のICU入室時の看護記録は、

日々の看護記録と同様に、看護過程に沿って記録している。この実習とは別に、全ての学生が実習期間内にICUまたは高度救命救急センターのどちらか1つの部門で1日の見学実習を実施している。この見学実習はクリティカル期にある患者・家族の看護の実際を見学し、同期にある患者・家族の特徴と看護の重要性について学ぶことを目的としている。見学実習は受け持ち患者への看護援助に支障をきたさない日程で調整され、多くは受け持ち予定患者の入院前もしくは退院後に設定されている。

５．データ収集方法

学生が記載した見学実習レポートは実習終了後に実習に関する記録物と共に実習を担当した教員へ提出される。成績評価、単位認定が終了したのち、見学実習レポート以外の記録物は学生へ返却され、見学実習レポートは実習担当の教員により保管される。成績評価および単位認定が終了した後、研究協力依頼を実施した。研究協力の同意が得られた学生の見学実習レポートを実習担当の教員より回収し、複写をおこなった。なお、複写した見学実習レポートには学籍番号、氏名を削除し個人が特定されないよう連結可能匿名化を行った。

６．分析方法

見学実習レポートについて以下の手順で分析を行った。

①見学実習レポートを精読し、認知領域の学び、精神運動領域の学び、情意領域の学びに該当する文節または文脈を抽出した。

②領域毎に抽出した文節または文脈を、意味内容を損なわないように1次要約、2次要約を行った。

③2次要約は類似性に基づきサブカテゴリー、カテゴリーに集約した。

７．分析の信頼性の確保

分析の過程において、質的研究の経験が豊富な研究者からスーパーバイズを受けることにより、分析結果の妥当性、信頼性を確保するように努めた。

８．倫理的配慮

3年生の全ての実習が終了し、成績が確定した後に対象者となる学生が全員揃っている場で、研究の目的、方法、プライバシーの保護、研究に協力しない場合であっても成績評価等に影響が生じないことについて文書および口頭で説明し、同意書の提出をもって同意を得たこととした。なお、同意書の提出後2ヶ月の間は同意撤回書をもって撤回が行えることを保証した。研究の実施に際しては、所属機関の倫理委員会の審査を受け、承認を得た。

Ⅴ．結　　果

１．研究対象の概要

対象は、ICU見学実習を行った23名のうち同意が得られた21名の見学実習レポートであった。

２．ICU見学実習における学生の学び

分析の結果、認知領域は4のカテゴリーが、情意領域は7のカテゴリーが抽出された。精神運動領域の学びは抽出されなかった。以下、認知領域、情意領域のカテゴリーについて示す。なお、本文中のサブカテゴリーは「　」、カテゴリーは【　】を用いて表現した。

１）認知領域

認知領域からは66の2次要約が抽出され、21のサブカテゴリー、4のカテゴリーに集約された。カテゴリーおよびサブカテゴリーは表１に示した。

(1)【医療者間の連携に関する理解】は、「継続看護を行うためには、病棟看護師との連携が大切であることを理解した」「他職種と連携し統一した医療を提供するためには、カンファレンスで情報共有する必要があると理解した」など7のサブカテゴリーを含み、他職種連携の重要性や連携方法についての理解として示された。

(2)【看護師に必要な能力・役割に関する理解】は、「判断や迅速な対応を行うためには、疾患や治療に関する知識が必要であると理解した」「患者や家族が求める医療を提供するためには、看護師が医師との調整を担う役割があると理解した」など5のサブカテゴリーを含み、ICUで働く看護師に必要な能力や役割に関する理解として示された。

(3)【患者・家族への看護援助に関する理解】は、「ICUの環境は身体的・精神的なストレスや不安がかかりやすいため、患者や家族が安心できるよう配慮する必要があると理解した」「免疫力が低下している患者が多いため、医療者が感染源とならないよう予防することが大切であると理解した」など7のサブカテゴリーを含み、ICUに入院する患者・家族に対する必要な看護援助についての理解として示された。

(4)【倫理的問題への理解】は、「せん妄による自己抜去を予防するため、ICUでは鎮静や抑制を行わなければならない状況があることを理解した」「抑制は倫理的問題が生じるため、専門的な意識を持って必要性を判断することが大切であると理解した」という2のサブカテゴリーを含み、鎮静や抑制に対する倫理的課題についての理解として示された。

２）情意領域

情意領域からは105の2次要約が抽出され、36のサブカテゴリー、7のカテゴリーに集約された。カテゴリーおよびサブカテゴリーは表２に示した。

(1)【医療者間の連携に関する気づき】は、「ICUでは臨床

表１．ICU見学実習における学生の認知領域の学び

カテゴリー	サブカテゴリー
医療者間の連携に関する理解	継続看護を行うためには、病棟看護師との連携が大切であることを理解した
	術後のケアを行うためには、手術部看護師との連携が大切であると理解した
	患者の安全・安楽を守るためには、看護師間の協力が必要であると理解した
	患者の状態変化や緊急時に備えるため、看護師体制を整えていることを理解した
	安全・安楽で質の高い医療を提供するためには、他職種と連携が必要であると理解した
	他職種と連携し統一した医療を提供するためには、カンファレンスで情報共有する必要があると理解した
	看護師間で患者の状態や援助の方向性を共有するためには、カンファレンスや記録が必要であると理解した
看護師に必要な能力・役割に関する理解	患者の状態を予測し異常の早期発見を行うためには、幅広い知識が必要であると理解した
	判断や迅速な対応を行うためには、疾患や治療に関する知識が必要であると理解した
	患者の状態に合わせたケアを行うためには、幅広い知識と看護技術が必要であると理解した
	患者の異常を発見した際に適切な援助を行うためには、判断力が必要であると理解した
	患者や家族が求める医療を提供するためには、看護師が医師との調整を担う役割があると理解した
患者・家族への看護援助に関する理解	ICUの環境は身体的・精神的なストレスや不安がかかりやすいため、患者や家族が安心できるよう配慮する必要があると理解した
	患者や家族の不安や動揺が大きいため、説明や心理的援助を行う必要があると理解した
	患者にとって家族の存在は安心感や異常の早期発見につがなるため、家族からの情報も必要であると理解した
	体重測定は患者の循環・呼吸に影響を及ぼすため、命にかかわるケアであると理解した
	免疫力が低下している患者が多いため、医療者が感染源とならないよう予防することが大切であると理解した
	自力で体位交換が困難な患者が多いため、褥瘡を予防することが大切であると理解した
	せん妄は患者のストレスや全身状態の悪化を生じさせるため、予防することが大切であると理解した
倫理的問題への理解	せん妄による自己抜去を予防するため、ICUでは鎮静や抑制を行わなければならない状況があることを理解した
	抑制は倫理的問題が生じるため、専門的な意識を持って必要性を判断することが大切であると理解した

工学技士という病棟ではみかけない職種が常駐していることに気がついた」「継続看護において病棟看護師との連携の大切さに気がついた」など6のサブカテゴリーを含み、他職種間の連携や継続看護における連携の重要性についての気づきとして示された。

(2)【看護師に必要な能力・役割に関する気づき】は、「ICU看護師は様々な医療機器を安全に使用できる必要があると気がついた」「ICU看護師には疾患や治療についての豊富な知識が必要であると気がついた」など7のサブカテゴリーを含み、ICUで働く看護師に求められる知識や態度、能力についての気づきとして示された。

(3)【患者・家族の特徴に関する気づき】は、「様々な疾患の患者がいることに気がついた」「家族はショックや不安を抱えていると気がついた」など、5のサブカテゴリーを含み、ICUに入院している患者の身体・心理的状態や家族が抱く思いについての気づきとして示された。

(4)【患者・家族への看護援助に関する気づき】は、「術後患者の状態を予測した準備を整える必要があると気がついた」「家族の不安を緩和するような精神的援助が重要であると気がついた」など10のサブカテゴリーを含み、重症化した患者や術後の患者および家族への看護援助についての気づきとして示された。

(5)【看護師としての在り方に関する気づき】は、「一人の人として尊重して関わることはどこの病棟でも変わらないと気がついた」「ICUの患者に対しても安全・安楽・自立という看護の基本は同じであることに気がついた」など4のサブカテゴリーを含み、ICU見学実習を通して得られた、看護師として大切にしなければならないことや看護の原則についての気づきとして示された。

(6)【倫理的問題への気づき】は、「ICUでは鎮静剤の使用や抑制を行うことはやむを得ないと気がついた」「ICUには自律と安全という倫理的課題が存在すると気がついた」という2のサブカテゴリーを含み、ICUで行われている鎮静や抑制に対する学生の葛藤が示された。

(7)【病棟環境に関する気づき】は、「ICUは患者の状態変化にいち早く気づくことができる環境となっていることに気がついた」「ICUには急変時に対応できるような薬剤や医療機器が準備されていることに気がついた」の2のサブカテゴリーを含み、特殊な病棟環境についての気づきとして示された。

表２．ICU見学実習における学生の情意領域の学び

カテゴリー	サブカテゴリー
医療職間の連携に関する気づき	他職種が連携して安全な医療が提供されていることに気がついた
	ICUでは臨床工学技士という病棟ではみかけない職種が常駐していることに気がついた
	ICUでは他職種との連携が重要であると気がついた
	継続看護において病棟看護師との連携の大切さに気がついた
	ICUの医師だけでなく各診療科の医師との連携が必要であると気がついた
	看護師間で情報共有がなされ、協力する体制がとられていることに気がついた
看護師に必要な能力・役割に関する気づき	ICU看護師は様々な医療機器を安全に使用できる必要があると気がついた
	ICU看護師は専門職としての意識を持って学習し続けていることに気がついた
	ICU看護師には疾患や治療についての豊富な知識が必要であると気がついた
	ICU看護師には薬剤についての知識が必要であると気がついた
	ICU看護師には状況を予測し判断する力が必要であると気がついた
	ICU看護師には臨機応変に対応できる冷静さが必要であると気がついた
	ICUのリーダー看護師には情報を共有し管理する能力が求められると気がついた
患者・家族の特徴に関する気づき	患者は重症で急変しやすいと気がついた
	様々な疾患の患者がいることに気がついた
	ICUには鎮静剤を投与している患者が多いことに気がついた
	患者は不安やストレスを受けやすいと気がついた
	家族はショックや不安を抱えていると気がついた
患者・家族への看護援助に関する気づき	常に全身状態の観察を行っていることに気がついた
	ICUは緊張感を持ちながらケアを行わなければならないと気がついた
	ICUでは多くのケアが細やかに行われていることに気がついた
	術後患者の状態を予測した準備を整える必要があると気がついた
	患者の不安や苦痛を軽減するようなケアを行う必要があると気がついた
	患者の全体を捉え即座に優先順位を立ててケアを行っていることに気がついた
	情報収集を基に患者の状態を予測して観察を行っていることに気がついた
	アセスメントを行い個別性のある計画を立てていることに気がついた
	意識のある患者に対しては家族の協力を得ることも大切であると気がついた
	家族の不安を緩和するような精神的援助が重要であると気がついた
看護師としての在り方に関する気づき	一人の人として尊重して関わることはどこの病棟でも変わらないと気がついた
	ICUの患者に対しても安全・安楽・自立という看護の基本は同じであることに気がついた
	意思疎通が困難な患者に対しても尊重した関わりを行うことが大切であることに気がついた
	どのような処置であっても患者や家族が納得することが重要であると気がついた
倫理的問題への気づき	ICUでは鎮静剤の使用や抑制を行うことはやむを得ないと気がついた
	ICUには自律と安全という倫理的課題が存在すると気がついた
病棟環境に関する気づき	ICUは患者の状態変化にいち早く気づくことができる環境となっていることに気がついた
	ICUには急変時に対応できるような薬剤や医療機器が準備されていることに気がついた

Ⅵ．考　　察

ICU見学実習における学生の学びを認知領域、精神運動領域、情意領域について考察し、その後に急性期看護実習におけるICU見学実習の現状と課題について述べる。

１．ICU見学実習における学生の学び

１）認知領域

認知領域とは知的活動に関わる教育目標を扱う領域[7]であり、本研究では、実習において得られた知識の意味について個々の学生が解釈していたことが明らかになった。

【医療者間の連携に関する理解】では、継続看護の必要性や患者の安全・安楽を守ること、質の高い医療を提供する重要性についての理解が明らかになった。さらに、他職種間の連携には、カンファレンスによる情報提供や記録に残すことの必要性が示されていた。これは、ICUでのカンファレンスに参加したことやICUで活動する職種の多さに気がついたことで、医療者間の情報共有の実際を知り、その目的を考える機会となったと考えられる。【患者・家族への看護援助に関する理解】では、生命の危機状態にある患者の状態に加えて、オープンスペースで医療機器に囲まれている環境がもたらす不安や恐怖を関連づけて看護援助を理解することができていたと推察される。【看護師に必要な能力・役割に関する理解】では、幅広い知識や技術、判断力や医師との調整力が必要であることが示された。池松[8]はクリティカルケア看護に必要な能力として、状態を

把握する能力、緊急時の臨床判断能力があると報告しており、学生はICU見学実習を通して臨床指導者からこれらの能力を感じ取っていたと考えられる。【倫理的問題への理解】では、学生は鎮静や抑制されている患者に対し、患者の安全を守るという倫理的課題に直面していたことが明らかになった。このような体験を通して急性期にある高次医療を必要とする対象に特徴的な倫理的課題について理解を深めていたことが示唆された。学生の倫理観は講義において関心を深め、自己の体験によって倫理的判断を発展させる[9]ように、本研究でも実習による自己の体験をレポートに記載する過程を通して倫理的判断が発展する可能性が見出された。

以上より、学生の認知領域の学習成果は、実習後にレポートとして実習体験を振り返り、学びを詳細に記述することで、実習で得られた知識や現象を意味づけし解釈していることが示唆された。しかし、既習したクリティカル期にある患者や家族・それらを取り巻く医療者との関連の記載は十分ではないことから、既知との関連や現象との関連に基づいて学生の理解を深めることは今後の課題であると考える。

2）精神運動領域

精神運動領域とは、様々な技術を展開するときに必要となる能力や技能に関わる教育目標を扱う領域[10]である。本研究では、この精神運動領域の学びは抽出されなかった。これは、ICU見学実習の目的がクリティカル期にある患者や家族への看護を見学することであるため、学生が直接的な看護実践を行っていないことが背景にあると考えられる。

3）情意領域

情意領域とは、価値、態度、信念の発達に関わる教育目標を扱う領域[7]であり、本研究では以下のように看護に関する様々な現象に対して気づいたことが明らかになった。

【医療職間の連携に関する気づき】では、ICU専従の医師と診療科の医師との連携の必要性や継続看護における看護師間の連携の重要性に気づくことが示された。【患者・家族の特徴に関する気づき】【病棟環境に関する気づき】では、急変した患者や手術後にICUへ入室し集中的な治療を受ける患者の身体・心理的な特徴に気がつくことが示され、この気づきから、【看護師に必要な能力・役割に関する気づき】【患者・家族への看護援助に関する気づき】という、看護師として必要な判断力や看護援助の必要性に気づいたと考えられる。さらに、【倫理的問題への気づき】では、患者に対する鎮静や抑制への葛藤を抱き、【看護師としての在り方に関する気づき】では、看護の基本となる安全・安楽・自立の考慮や、人として尊重した関わりが求められる看護者としての態度への気づきが明らかになった。学生は実習を通して患者・家族の価値観やニーズの尊重、患者の自尊心の尊重という看護者としての在り方を考えていく[11]。本研究において、ICUという医療が優位となる環境であっても学生は、見学実習を通して看護師としての在り方や看護観を培っていくことが見出された。

以上のように学生は、患者やICUの環境、さまざまな現象や問題を感じとる感受性を示し、感じたことを意識して看護に関する気づきに変えていることから、この学習は情意領域の発達を促す可能性があると考える。学生は、実習において看護師の言動が契機となって、相手を尊重することや専門職としての姿勢など情意領域の中の「価値づけ」から「価値の組織化」の過程まで形成していく[12]。今後は、現象に対する学生の気づきをさらに深められるような方略を検討していく必要がある。

2．急性期看護実習におけるICU見学実習の現状と課題

本研究により、学生はICU見学実習により認知領域、情意領域の学習成果を得て、実習目標の急性期にある患者・家族の特徴と看護の重要性について学んでいたことが明らかになった。寺島[13]は、急性期看護の独自性を、生命の危機からの回復過程や非日常的な物的・人的環境下での特殊性の中で、対象の生命力を実態・認識・社会関係の諸側面から絶えず観察し支え、対象の持てる力を最大限に働かせると報告している。本研究において学生は、病態の変化が著しく常に生命の危機に直結する危険性をはらんでいる患者の特徴や多種多様な医療機器が設置され、様々な医療者が関わっている複雑な環境の中で、看護師に必要な知識や態度、必要な看護援助について学習することができていた。このことから、1日の見学実習であっても急性期看護の独自性を捉えることが出来る可能性が示唆された。ICU見学実習の学びとしてICUの環境や看護の役割、患者の特性については報告[5][14]されているが、本研究では、手術後の継続看護の重要性などにも学びを広げることができており、急性期看護実習におけるICU見学実習は周手術期看護の理解にも繋がることが示唆された。しかし、現在の実習形態を要因として精神運動領域の学びは見出されなかった。今後はICUでの精神運動領域の学習の必要性の有無も含めて演習・実習内容の検討を課題としたい。

Ⅶ. おわりに

学生のICU見学実習の学びを教育目標分類学による学習成果の評価の視点で分析したことで、認知領域、情意領域のそれぞれの学びが明らかになるだけでなく、認知領域の学びと情意領域の学びの視点の共通性が見出された。学生は看護の現象を気づきとして感じとり、レポートとして思考の整理を行うことで、その現象を意味づけることに繋がったと考える。一方で、情意領域の特徴的な学びとして【看護師としての在り方に関する気づき】が示された。これは、危機的状況の対象を看護するという場面において、改めて看護師としての在り方が浮き彫りとなった可能性がある。成人看護実習において高次医療を学ぶ機会としてICU見学

実習を設定することは、看護の現象を直に捉える機会となる。しかし、本学ではICUまたは高度救命救急センターのどちらか一方の実習としていることから、急性期看護の特徴や学びはICUと高度救命救急センターでは異なっていることが推察される。今後は、高度救命救急センターでの学生の学びを明らかにし、看護実践能力育成のための急性期看護実習の在り方を検討していく必要がある。

Ⅷ. 引 用 文 献

1）文部科学省：大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会：大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告書, 2011 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/__icsFiles/afieldfile/2011/03/11/1302921_1_1. pdf, (2016-11-01)

2）平良由香利，室伏圭子，大釜徳政：学生がクリティカルケア看護の独自性を捉えた場面に関する検討. 看護教育54(8)：732-739, 2013

3）杉森みど里,舟島なをみ：看護教育学.第3章看護学教育課程論. 第5版. 東京, 医学書院, 2012, p136-137

4）Billings DM et al.（奥宮暁子他訳）. 看護を教授すること　大学教員のためのガイドブック（第4版）. 東京. 医歯薬出版, 2014 p155-158

5）片穂野邦子, 松本幸子, 高比良祥子：成人看護実習における集中治療部見学実習での学生の学び－実習記録内容の分析を通して－. 県立長崎シーボルト大学看護栄養学部紀要6：43-48, 2005

6）佐藤ゆかり, 内藤明子, 山口千秋：クリティカルケア実習における学習内容の検討－実習記録とアンケートの分析から－. 愛知医科大学看護学部紀要3：57-71, 2004

7）Bloom BS et al.（梶田叡一他訳）. 教育評価法ハンドブック. 第9版. 東京. 第一法規, 1973, p429-441

8）池松裕子：クリティカルケア看護の特徴と看護者に求められる能力. 看護教育41(4)：306-311, 2000

9）坂上百重, 内山美枝子, 瀬倉幸子：看護学生の「倫理観」育成の初段階における学習効果　平成20年度入学の1年次生調査から. 新潟大学医学部保健学科紀要9(2)：3-11, 2009

10）舟島なをみ：院内教育プログラムの立案・実施・評価. 第2章院内教育プログラムの立案・実施・評価に必要な基礎知識. 東京. 医学書院, 2011, p24-29

11）内藤明子, 佐藤ゆかり, 鈴木里美他：成人看護学急性期実習を通じて学生が考える「看護者としてのあり方」－実習レポートの分析から－. 愛知医科大学看護学部紀要5：9-19, 2006

12）當間彩:看護学生が臨地実習で看護観を培っていく過程　看護学生時代に看護師の助言から受ける影響.神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究収録39：81-88, 2014

13）寺島久美:急性期看護の独自性に関する研究－ICUにおける自己の看護実践を対象として－. 宮崎県立看護大学研究紀要2(1)：1-11, 2002

14）園田裕子, 渡邊郁子, 鈴木裕子他：ICU見学実習での学習のタイプに関する研究－成人看護学実習における実習記録の内容分析から－. 愛知きわみ看護短期大学紀要5：73-86, 2009